

発電設備専門技術者 インタビュー ③⑥

山口 浩寿 さん（西日本発電機株式会社）

「お客様が望んでいるものは何かを掴んでいったかな」と若きサービスマン時代を振り返ります。

原動機を初めとする整備の技量は既に備わっていましたが、更なる技術の向上に余念はありませんでした。入社4年目に自家用発電設備専門技術者資格を取得。また、シーケンスの実際の動作を知るため、独り勤務時間外に工場にあってリレーやタイマーを用いた回路を試作し、制御の原理を習熟したといいます。

中小企業のユーザーとの交流

当時同社の商品は300kVA以下の中小型が中心で、設置先も中小企業の施設が多いといいます。山口さんは、非常用発電設備のメンテナンスを通じ、第一次産業、とりわけ九州地方で盛んな魚の養殖や養鶏の経営者の方との交流を深めます。

鯉などの養魚場は半島の突端部の湾や入り江に多く、電力会社の送電網では最終に位置する場所。台風による停電も大都市に比べ多発していました。一方、養殖業は揚水ポンプ、給餌機などの他、完全養殖場であれば、池の水温を保つための温水器、空気を送り込むブローなど、魚の生育に必要な電気設備は数え切れません。非常用発電設備を導入したものの、本当に自動起動するのか、緊急時にはサービス員が対応してくれるのか不安視する経営者もいました。

「『電気設備が止まって30分経てば魚は全滅するよ』って言われた時、こちらも昼夜問わず対応しなければならなかった」と、山口さんはその時の経営者の表情を思い浮かべます。

怪訝な顔をする経営者に対し、山口さんは、正しいメンテナンスをしていれば発電設備は必ず稼働することを説くと共に、自宅の電話番号を教え、何かあれば直ぐに連絡して下さいと答えたそうです。

結局の処、山口さんが担当した物件で不始動や異常停止した設備は1件もなく、経営者らの心配は杞

佐賀県北西部、玄界灘に面し古代から大陸方面の海上交通の拠点であった城下町・唐津市。デンヨーグループの戦略子会社である西日本発電機株式会社は、ここ唐津市にて発祥。幾多の製品を世に送り出し、優に半世紀以上の歳月が流れました。

主に同社の製造・保守部門を歩まれた山口浩寿さん（57歳）に、製品のアフターサービスなどで得られた、お客様や地域の方々との固い「絆」を紹介して頂きました。

メンテナンスの最前線でお客様と接する

山口さんは唐津市に隣接する伊万里市の出身。入社は昭和57年、自動車ディーラーでのメカニック経験を活かしての転職でした。研修の後、メンテナンス課へ配属となります。

当時、同社の販売先は8割以上がアジア・中近東を中心とした海外向けであり、国内市場は同業他社に先んじられていました。メンテナンス課は総勢5名の小所帯ながら、山口さんも九州を中心にアフターサービス業務で発電設備の設置先を回ります。前職では新車の販売業務も行ってた山口さん。お客様の懐に飛び込み、打ち解けるのにはそう時間は掛かりませんでした。「作業した後に四方山話しながら、

憂に終わりましたが、当時を回想し、発電設備のユーザー、特に中小企業オーナーとの接し方について山口さんはこう語ります。

「災害時にオーナーが当社へ問い合わせる際、サービス員の人が予め分かっていたら、夜間や休日など電話口に出るだけでも先方は安心します。メンテの実務から外れて10年以上経ちましたが、今でも設備全般について、お客様から直接連絡がありますよ。」



同社製発電設備搭載の高圧移動電源車

中小企業の施設のみならず、地元の公共施設においても、自然災害による停電が発生し、山口さんが納めた非常用発電設備が電力供給を担うことが多々ありました。

平成3年の秋、福岡県の某官公署においては、九州北部を襲った台風により地域一帯が停電。非常用発電設備（300kVA×1基）は稼働したものの署内に通電しないとの緊急連絡が深夜、山口さんの自宅に入ります。通話内容から、山口さんは商用側から発電側への送電切替器が作動不良を起こしていると即座に判断。暴風雨のため、直ぐには現場へ駆けつけられない状況下、現地署員に手動にて発電側へ切り替える様指示をします。

約30分のやり取りの後、電話口から拍手が聞こえ、署内の灯りが点いたと言われた時、山口さんはほっと胸を撫で下ろしたといます。「我々の保守範囲ではなかったけれど、施設全体の回路は把握していました。世間一般では『当社の所掌範囲では有りません』の一言で済むんでしょけどね。」

官公署は通電直後より災害司令塔としての活動を再開。同社の発電設備も商用側が復旧するまでのおよそ4時間、大役を果たしました。

九州特有のメンテナンス事情

九州地方は四方が海に囲まれていることもあり、

塩害による自家用発電設備の不具合が多い。特に目に見えにくい形で故障の原因となるのが、制御部分の接触不良。屋内に設置した発電設備であっても、海に近い場所では潮風が入り込み塩分が付着。錆の進行がより早まることがありました。制御装置の配線が短絡し、基盤交換が相次いで発生。そのため同社では、設置環境の悪い場所では、特殊シリコン又は基盤全体をコーティング処理、加えて塩害フィルタを装備し不具合を防いでいるといます。

また、メンテナンスの現場では桜島の火山灰にも悩まされました。灰とは言うものの、実際は強酸性の砂やガラスが主成分。同社ではメッシュを細かくした給気フィルタを使用すると共に、フィルタ面積を広くし給気量を確保。山口さんもメンテナンス部時代に提案した改善が何点も実用化されました。

「サービスマンはユーザーと設計側を繋ぐ重要なポジション。現場で想定外の事象が発生した時は、その情報をいち早く設計へフィードバックして欲しいね」と設計開発部門との連携の大切さを強調します。

自家発は人々の営みに密着している

昨年4月に発生し多くの被害を出した熊本地震。電力会社では、停電地域への移動電源車の派遣に際し、同社へ運転監視員の派遣要請がありました。山口さんは責任者としてメンテナンス部の精鋭2名を送り出すことを決断。震災翌日、早速阿蘇市の避難施設への電力供給のため、社員を現地に向かわせました。社員は24時間交代勤務で、電源車に搭載されている同社製の発電設備（500kVA×1基）が安全確実に発送電されているかその任に当たったといます。

「震災直後の数日間、社員は車内で寝食しながら、燃料補給を行ったり、計器類の測定などの任務を完遂しました」と山口さんはその労を称えます。

電源車は約3週間運転し続け、避難所の生活を支える土台となり続けました。

これまでの業務で得た経験を顧み、山口さんは最後に語気を強めこう話します。

「自家発って、人々の営みに密着していることをひしひし感じる。古い言い方かも知れないけど、これからも『我が子』を世に送り出す想いで、真っ当な製品を作り続けていきたいですね。」

時には冗談を交え、聞き手を惹き込んでゆく話術を持つ山口さん。何事も積極果敢に取り組むその姿勢が、良品を生み出す原動力となっています。